

りがいを感じております。先端技術の習得、確かな知識の獲得が社員一人一人に求められております。セミナーへ参加したり自己啓発を行って自分の力を伸ばし、挑戦する心を忘れずに、常に信頼される製品作りを目指し、

少しでも社会へ貢献できるよう努めて行きたいと考えております。

最後になりましたが、同窓会皆様のますますのご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

小石 高裕

日本電気株式会社

平成8年電気工学科卒
平成10年電子工学専攻修士了



平成10年3月に修士課程を修了し、NECに入社して10年が経ちました。入社後はコンピュータ事業部に配属となり、これまで異動することなく今に至ります。十年一昔とはよく聞く言葉ですが、今振り返るとあっという間の10年でした。

大学では、坪内研究室（旧御子柴研究室）に所属し、移動体通信に関する研究に携わっていましたが、卒業当時は、インターネットの商用利用が盛り上がっていた時期であり、また私自身コンピュータに興味があったことから、NECのコンピュータ事業部という、専攻とは少々異なる分野を志望しました。入社後は、すぐにインテル社製CPUを搭載するサーバ装置のLSI論理シミュレーションを担当し、後継機種のLSI論理設計を担当しました。設計を担当した箇所は、装置全体で見るとほんの一部ですが、ご存知の通り、ほんの一部の間違いでもやり直しが効かないのがLSI設計です。経験の浅い私にとって、大変なプレッシャーでしたが、無事最後までや

りきることができたのも、大学時代に研究活動を通じて身につけた、粘りと精神力のおかげとっております。初めて自らが設計した装置が、世に出て行くという喜びを感じる事ができた仕事でした。その後、ブレードサーバの基板設計、スーパーコンピュータのLSI物理設計などを担当しましたが、大学で学んだ論理的な考え方、物理、数学の基礎知識は、幅広い応用が利き、歳を重ねるごとに自身の貴重な財産となっている事を実感しています。

現在は、直接製品開発を行う現場から離れ、製品戦略を扱う業務に携わっていますが、めまぐるしく変化する技術の変化に取り残されないよう、各種論文調査を行ったり、研究発表会に参加したりしています。近年は、先端技術だけでなく、開発手法や生産方式にも、次々と新しい提案がなされています。新しいことに取り組むのは勇気のいる事ですが、大学生活で身につけた、「挑戦なくして進歩なし」の姿勢で、課題に取り組んでおります。また、最近注目されている環境技術ですが、これまでのところ、IT機器の環境対策では、海外勢が一步リードしている状況です。しかし、環境負荷の少ない製品作りは、資源の少ない日本のお家芸と思っていますので、これまで得た知識や経験を活かし、美しい地球を未来に残せるような製品開発を行なっていきたいと考えております。

最後になりましたが、同窓会の皆様のますますの御健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

大久保 篤 徳

株式会社デンソー

平成12年通信工学科卒
平成14年電気・通信工学専攻修士了



平成14年3月に修士課程を修了し、株式会社デンソーに入社して6年になりました。在学中は医療用診断装置に用いられる超音波トランスデューサの研究をしていましたが、入社してから現在まで車載用ミリ波レーダセンサの製品設計に従事しています。安全環境分野で社会の役に立てる仕事をしたいという想いで入社し、その願いがかなって今の部署に配属されたので、忙しいですがやりがいを感じながら日々を過ごしています。

クルマに対して今社会から期待されるのは「地球環境」にやさしく、「安全」に走るクルマです。「安全」分野には、ABSやエアバック等によって衝突時の被害を最小限にとどめる「衝突安全」と、車が危険を事前に検知して衝突を警告・回避する「予防安全」の製品が開発され

ています。「予防安全」にはPCS（プリクラッシュセーフティ）というシステムがありまして、車が前方の障害物を検出して、危険な状況になった場合はドライバーへ警告し、衝突すると判断した場合は衝突回避のブレーキ操作をします。ミリ波レーダセンサは電波で前方物との距離と相対速度を測ることができるため、このPCSの目の役割を担う製品です。また、前方車との距離を一定に保ちながら走行制御するACC（アダプティブクルーズコントロール）にも用いられており、クルマの利便性向上にも貢献します。

当社のミリ波レーダセンサは私が配属されてすぐに初代が市場に投入されました。一般にもまだまだ知られていない製品ですが、普及のために競合他社メーカーもどんどん新しい製品を出しており、競走が激しい製品です。そのため、低コスト化、小型化などのレベルアップを図った次世代製品を短期間で開発しています。私はハード設計を担当しており、車載製品品質のための設計でクリアすべきハードルがすごく高く、正直くじけそうになることが何度もありますが、上司や他部署との連携をとりながら解決しています。今後も数多くの難題が待ち受けているでしょうが、周りの専門家の協力を得たり、